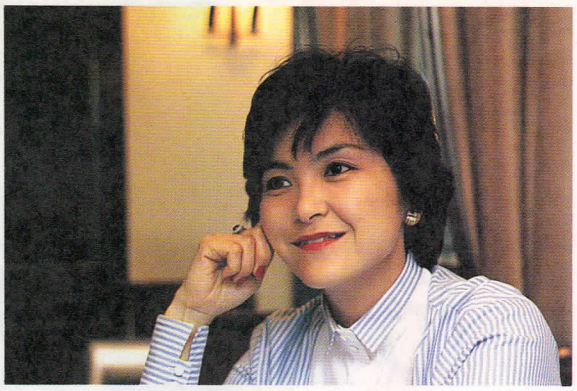
娘は私の宝物、そして師でもあるんです

ジャーナリスト　野中ともよさん

そのさわやかな笑顔と親しみやすい人柄でNHKのメインキャスターとして、お茶の間でもお馴染みだった野中ともよさん。執筆活動や客員教授の仕事を続けながら、キャスターの仕事を休職、結婚・出産を経て、現在は2歳7か月のまりなちゃんを育て、「人生が3倍にもふくらんだ！」という母の顔の持ち主でもあります。結婚前のジャーナリスト時代は、1分刻みの生活をおくっていたという野中さん。妊娠・出産・子育てを通して、自分が感じてきたこと、変わってきたことなど尽きないお話を、始終にこやかに、生き生きと語ってくださいました。

プロフィール

東京生まれ。米国ミズーリ・コロンビア大学大学院でフォト・ジャーナリズムを学んだ後、ジャーナリスト、キャスターとして幅広く活躍。87年から中京女子大学客員教授。88年のソウルオリンピックの仕事を最後に、NHKのキャスターを充電のため休職。同年結婚し、89年長女まりなちゃんを出産。主な著訳書に、妊娠中翻訳した「チエンジング」（徳間書店）、環境問題を取り扱った「私たち『地球人』」（集英社）などがある。



命づくりって本当に大事なこと

――マタニティライフの期間、どんなことを感じてらしたのでしょう?

「こういうことが、命をつくることなんだ」って、感じながら過ごしましたね。この命づくりって、『重責』そのものの仕事という意味で、とてつもない重労働だと思いました。どんな世界超一流のハイテク工場でも、この『命づくり』ってできないですよね。しかもこの命は、感情も考え方もある、私たちが次代にバトンタッチする存在なんです。これは本当に大切な事業なんですね。

――お母さんと赤ちゃんが、まさに一緒に生きる時でもありますよね。

私が「おいしいなぁ」と思うものを食べると、赤ちゃんが喜ぶのがわかるのねぇ。「こわいな」と思うとおなかの中でグッグッと、くずれるみたいに動くんですよ……。私が感じたことが、赤ちゃんを通して、もう一度、私に戻ってくるんです。

――新しい発見もありましたか?

以前は「人間の感情はホルモンがつかさどっている」というのが、知識としてあったんです。そして妊娠してから、それを身をもって実感できました(笑)。というのは、このホルモンが大変化するのが妊娠でもあるんですよね。なにしろ、「ああ、雨が降ってるわ……」って悲しくなるんです!私は報道の仕事をしてきて感情のコントロールはとても得意だったはずなのに。人間というのは、頭で考えただけでは分からない生命というドロドロとした営みの中のほんのちっぽけな存在なんだなぁと、すごく感じられましたよね。

……そんな私の様子を見つめていた主人も、私のおなかが大きい時、よくおなかに手を当てて、「いいなぁー!『命づくり』を自分自身の体の中で感じるっていうのは、どういう気持ちなんだろう」って、いつも言ってましたよね。妊娠が分かった時も、「うん、僕は出産に立ち会う」って即座に決めてました。

子育てを通してものの見方が変わりました

――その命が誕生して、赤ちゃんと対面した時のお気持ちは?

これは、みんな、立前と本音があるのね(笑)。出産して、生まれたての赤ちゃんを見た時は『ギョ』っとするの。友達に聞いてみても、やっぱり「『ギョ』っとしたわよ。『何じゃ、こりゃ』と思ったわよ」って。私の場合は、次の瞬間に目が36個くらいになった感じで、赤ちゃんの手や足をワッとみました。そして元気に生まれてきてくれたことが分かると、ホッとして、「あー、ありがとう。よく来てくれた」という気持ちが込み上げてきましたね。生まれてすぐに、あんなちっちゃな口でお乳を飲んでくれる……すごいですよね。夫婦で圧倒されました。

――出産と同時に子育て奮戦記も始まったのでは?

もう、大変な修羅場ですよ。例えば、2時間おきの授乳、おむつの処理などなど。2か月を過ぎた時にね、初めて、4時間かためて寝られたんです。天国だと思いました(笑)。

けれども、育児を通して、私が何よりも面食らったのは、それまで仕事で培ってきた『プロジェクトマインド』を、あの命の魂――まりながことごとく否定してくれたことなんです。

――『プロジェクトマインド』というのは?

例えば、新しいスポーツ番組を作るというのは一つのプロジェクトですよね。そして、絶対に成功させるという意志のもと、その時点でのスポーツ番組をリサーチし、データにする。そのデータに基づいて、どういう番組を作るかという事を打ち出して、形にしていくわけなんです。私の言うプロジェクトマインドというのは、こんな仕事の進め方取り組み方の事なんですね。そういう感覚の世界に生きてきたので、『子育て』というのも一つのプロジェクトになったわけです。「いい子に育ててやろう、いいママになってやろう」と思ったわけですよ。日本版、アメリカ版の育児書やら、お医者さんや友達の話なんか、入手できるありとあらゆる資料をリサーチして、自分でデータを作って、それに基づいて育児しようとしたんです。でも、あの命の魂には、どうしてやろう、こうしてやろうというプロジェクトマインドはね、通用しませんでしたね。

――子育てについて、どういうふうに思われるようになりました？

自分がいかに心豊かに過ごすかってことを考えて、そして、その心豊かな状態で、子どもと接することが大事なんだ、と思うようになりましたね。確かに、子育てというのは、子どもが親を見て育つ以上、ずいぶん自分が問われる作業ですよね。でもね、「教えてやろう」と思うと負担になるけれども、「彼女と一緒に勉強していこう」と思うと、肩の力が抜けるし、そのほうが楽しいですね。

――子育てを通して、野中さん自身も変わっていかれたんですね。

ものの見方が変わりましたね。それまでは、ずっと男社会で働いてきたわけですが、その男の仕事というのは、2、3日徹夜しても、次の日にはグッスリ寝られる。結果がでても、儲かるとか、うまくいったとか、その程度。うまくいくと褒められたりもするでしょ。子育てはそうはいきません。相手は『命』そのものですからね。男社会の仕事というのは『子育て』の前ではケトばされてしまうほど、たわいもないカワイソーな存在（笑）。

妊娠、授乳期は、私が食べた物が彼女の体になっていくわけですから、水を初めとして環境についても、改めて考えましたよね。職業柄、環境問題についても、人一倍の問題意識があったと自負できるんですけど、それが仕事上だけのものだったと気付かされましたね。身をもって考えるようになりました。

社会に対しての見方も変わりましたね、例えば、出産・子育てという事業をしたくなくなるような社会は、ロク

な社会じゃないですね。そして、今の日本がまさにそうなんですね。妊娠から子育てという事業は、母となる女性だけでできることじゃありません。彼女を支えるパートナーとしての父親と二人がやっていくこと。仕事などして社会に参加しながら、この二人で命づくりの事業をしていけるだけの世の中に変わっていくってことは、今の日本に必要ですね。命づくりの大切さを思うと、つくづく実感できることです。

まりなには『親育て』してもらってます

――現在、2歳7か月に成長したまりなちゃんの様子は?

我が家の目覚し時計はまりなんです。「パパ/ママ/おっきの時間」って起こされて。この声で一日が始まります。食欲も旺盛で、ステーキも120gくらいならペロリ。そして、トイレから「マミー、ゲンキなウンチ出そう!」なんて大きな声で言ってきたり(笑)。大人だと気付かないような発見もしますよ。例えば、都心の公園で散歩してても、驚くほど大きなアリが何か運んでるのを見つけてね、「マミッ/アリさんがね、スゴイよ/力持ちだねー。何食べてんのかねぇ」なんて。楽しいですよ。

――一緒にいて、ハッとするような発見もあるのでは?

例えばある時ね、眠ってるまりなを見てたら、彼女の指は主人に、耳は私に、頬のカーブが私の母に、額は主人の父にそっくりだってことに気付いたのね。命が受け継がれるんですね。ずーっと、ずーっとね。どこが始まりだったか、なんて思う。そうすると、人は成長してしまうとね、一人で大きくなったような気がしているけれども、人の世の中でね、生かされているんだなあ、ということなんか、分かるのね。

――野中さんにとってまりなちゃんの存在というのは何でしょうか?

宝物でもあり……師でもありますね。『親育て』してもらってますよ、彼女に。いろんな事を教えてくれます。もう一回、子育ての目線に下がって、地球を見たり、地面を見たり、花を見たり……そういう事を教えてくれるために、ここに来てくれたんだなって、思います。「ありがとう」って思う存在ですね。

――大きくなっていくまりなちゃんにとって、特に大切だと思われることは何でしょう?

彼女が大人として、一人の人間として生きていかなければならない21世紀は、日本だけの「かくあるべし」というものさしが通用しない時代だと思うんです。価値観が違う国で育った人達と一緒に学んだり、仕事をしていかなければならないんですね。それには、知識や知恵よりも、まず、人の痛みとか、弱さを理解してあげられることが大切だと思うんです。その心のやさしさを持つことが、彼女にとって一番大切なことの一つだろうと思います。『まりな』はMARINERからつけた名前なんです。それは、わたしたち夫婦は海が大好きだから。海では、何かあった時、何人同士でも助け合うし、港は本来的には、どこの船でも、豪華客船でも、ちっちゃなボートでも分け隔てなく受け入れる。そして安息と休息を与えて、また、元気に出発していける場ですよね。それがMARINERなんです。国籍に関係なくいろんな人を受け入れることができて、自分の持っているものを誰にでも分け与えてあげられる――まりなにそんな人間になってほしいと思ってます。

――たくさんのお話、ありがとうございました。

取材協力/イタリアンレストラン「トウート・バラッティ」(青山)

Be Mam

ビーマム

新人ママたちの
妊娠・出産・育児情報誌

1992 Vol.12

おぎゃ献金

日母おぎゃー献金基金推進誌